

成城〈曲章四番〉本所収「呪咀男」の性格と表現

小林 千 草

一 はじめに

成城大学図書館蔵『狂言集』一四冊は、大きくは三グループの雑纂的な狂言台本の集まりである。そのうち、^①大蔵流台本については、

(1) 小林千草二〇一六・一〇『幕末期狂言台本の総合的研究 大蔵流台本編』（清文堂出版刊）

でそのあらかたを報告し、^②和泉流台本については、

(2) 小林千草二〇一六・三「成城〈甲申〉本における「ぜあ」——その実態と狂言台本としての性格——」（『東海大学紀要文学部』第一〇四輯）

でその一端を報告し、^③鷺流台本については、

(3) 小林千草二〇一六・三「成城〈曲章四番〉狂言本の性格について——名女川本との共通曲を中心に——」（『湘南文学』第五一号）

(4) 小林千草二〇一六・九「成城〈曲章三番〉狂言本の性格と用語

——「悪太郎」「鈍太郎」「花折新発知」「腰折」「梟」を通して——」（『近代語研究』第一九集）

(5) 小林千草二〇一七・二「幕末書写鷺流狂言台本の性格と用語——成城〈曲章三番〉本「伯養」「すいから」の場合——」（『国文学言語と文芸』第一三二号）

(6) 小林千草「成城〈曲章三番〉本所収「因幡堂」の性格と言語」（『東海大学 日本語・日本文学 研究と注釈』第六号。刊行遅延中）

を通して、報告をつづけている。

本稿は、(3)～(6)につづいて、成城〈曲章四番〉^{（注1）}本所収の「呪咀男」に関して、その性格や内容、本文の表現や用語について考察を加えたものである。

成城〈曲章四番〉本は、鷺流台本と推定され、

① 萬延元年申歲十一月吉日写之／西口克太郎／吉迪（花押）／蔵書（巻末。／は、改行を示す）

② 右者家元直傳之秘書ナリ 鷺十代目 拱辰先生ノ書ヲ／安政

四丁巳年七月岡山義憲写候ヲ今度又西口吉迪写置ナリ（9ウ）
などから、西口克太郎吉迪の書写本、かつ、蔵書であったことが
判明する。萬延元年は一八六〇年、安政四年は一八五七年で、幕
末期の狂言台本ということになる。

成城〈曲章四番〉本は、(3)の考察から、宝暦名女川本と共通す
る曲については、それとの似より度がきわめて高いものであるこ
とがわかったが、「呪咀男」は、驚流の現存台本には共通曲が見
られず、きわめて特異な曲となっている。

成城〈曲章四番〉本には巻頭に目次があるので、それを紹介
し、「呪咀男」の当該写本における位置を確かめておきたい。

一 岡大夫（1オ→3オ） 二 呪咀男（3オ→6オ） 三 誓
女座頭（6ウ→7ウ） 四 通圓（8ウ→9ウ） 五 居杭算
置（9ウ→13オ） 六 靱猿（13ウ→15オ） 七 名取川（15
オ） 八 文蔵／語／前（15ウ→16オ） 九 鍋八撥／拍子（16オ
→ウ） 十 文荷（16ウ→18オ） 十一 武悪（18ウ→24ウ）
十二 墨塗（24ウ→27ウ） 十三 察花（28オ→30ウ） 十四
真奪（30ウ→31ウ） 十五 太刀奪／末（32オ） 十六 狐塚
（32オ→34オ）
このうち、*印を付した七曲が、宝暦名女川本との共通曲であ
る。

二 〈曲章四番〉本所収の「呪咀男」

——曲名から辿れること——

池田廣司氏作成の「狂言曲目所在一覧表」^(注3)で、「呪咀男」を検

索すると、「のろいおとこ（呪い男）〈大蔵流八右衛門派番外〉」
として、「和泉流／三百／下^(注4)」と記されている。つまり、和泉
流の『三百番集』下^(注4)頁に収録されているが、実は「大蔵流八
右衛門派の番外曲である」ことが示されている。

実際に、『狂言三百番集』下にあたると、

③シテ—鬼女 ○アド—男・法師

とあり、登場人物構成を異にし、骨格となるプロットに共通性は
あっても、別曲と言ってよいものである。ただ、プロットが似て
いるので、セリフの一部には同一発想の物言いが見られる。それ
らについては、後の考察で適宜触れるところがあろう。

さて、『狂言三百番集』上の「緒言」において、編者の野々村
戒三氏は、

④本集の編者が曾て公刊した「狂言集成」は、和泉流三宅派家元
三宅庄市手澤本を底本として、同流狂言二百五十番・同番外曲
十三番・驚流狂言十二番・大蔵流狂言番外曲九番・及び和泉流
能間二百四十八番・同番外曲百七十五番を収録したもので、最
も廣汎に互り且つ研究上憑據するに足るものである。

そこで本集には、右集成本諸曲の中から異名同曲の一番及び
能間を除いた全部と、更に石田元季氏の所蔵に係る大蔵流八右
衛門派の諸曲の中から選出した「福祭」・「祝獅子」・「獨り松
茸」等廿一番とを併せて収録し、兼ねて装束附を附記し、且つ
厳密なる校訂を加へ、又集成本の誤植をも是正したのである。

(上2頁)

と述べておられる。傍線部が、『狂言三百番集』下所収の「呪ひ

男」が関わる部分である。

『狂言三百番集』上の刊行は昭和十三年（一九三八）一〇月、下は昭和十七年（一九四二）七月である。野々村戒三氏は、「呪ひ男」の写本を提供された石田元季氏がどの時代のどのような写本を持っていたのか明らかにされていないが、大蔵虎清本・虎明本・虎寛本・虎光本に一切所収されていないところを見ると、それ以降、幕末期頃のものと考えられる。

野々村戒三氏は、和泉流にない曲として、これを翻刻されて、昭和十三年時点で現行曲および伝承曲を網羅した一書を誕生させられたわけである。他流の番外曲を借りてまで収められた、いわば稀曲ともいべきものが、鷺流台本と推定される（それも鷺伝右衛門系であることが明らかに推定される）成城へ曲章四番本に、「岡大夫」「文荷」「武悪」「墨塗」「狐塚」などの名曲と並んで所収されていることは、研究者だけではなく、鷺流の伝承保持にたずさわっておられる方々にとっても、朗報ではないだろうか。

鷺流にあっても、延宝忠政本・享保保教本・宝暦名女川本・安政賢通本などに所収がなく、のち地方に伝播した鷺流狂言を所収した『山口鷺流狂言資料集成』にも所収されていないので、いつ頃成立した曲なのか不明ではあるが、和泉流台本群にも全くないことから、大蔵流および鷺流周辺で、江戸後期、幕末期に成立したものと一応の推定を立てておこう。なお、『狂言記』諸本にも、曲名が見出されない。

三 〈曲章四番〉本「呪咀男」のセリフ分析

本節では、〈曲章四番〉本「呪咀男」を物語の流れにそって、本文（セリフ）を分析していく。この過程において、使われることばの様相などから、登場人物造型（キャラクター造型）についても明らかにっていくであろう。

⑤名乗常之通 某此間打続て夢見か悪シウ△ルニ依て祈念祈祷致セ氏更ニ替る支も△ラヌ 夫故か氣分も勝れませぬ 又爰に心易ウ咄す者か△ル程に是へ参り相談致そふと存る 先急て参ふイヤアノ仁ノ方に能祈禱か或ハ菓杯か有舞物ても△ラヌ程に召てメウト存る イヤ参る程に是ぢや（3オ）

これは、又アドである男が、最近、夢見が悪くて気分もすぐれないので、知人であるシテの所に相談に行く場面である。つまり、又アドの名乗りと道行である。

⑥案内常之通（又）其支て△ル けふくるも別の事でも無ひ 某此間殊之外夢見か悪い 夫故か氣分も勝れぬ 此方て色々と薬も吞又祈念祈禱もスレ氏能と思ふ支か無に依て若又和ゴリヨノ方に能祈禱をする人か或ハ功者ナ医師モ有ふかと思ふて来たよ（3オ）

⑥は、来訪の挨拶をすませたのち、シテが来訪の目的を尋ねた際の、又アドの返答である。冒頭の「其支て△ル」のみ「ござる」という丁寧語が入るが、あとの四文全て、丁寧語もなく、相手への敬意表現もないことが注目される。おそらく、シテより若いこの又アドは、身分的にも経済的にも、シテより上位者であ

る。⑤における又アドの一人言で、「アノ仁ノ方に」とある「仁」は、おそらく「ひと」と読ませるものであろうが、もし、「じん」と読ませるものならば、「御仁^{ごじん}」とまであがめなくとも、又アドはこのシテをある面では頼っているという背景が見てとれる。人生経験豊かで、世間智にたけた年長者というところであろうか。

⑤で又アドはシテのことを「心易ウ咄ス者」と言っていたが、心易さが、尊敬語・丁寧語抜きのお話及び最後文末の「うよ」という終助詞に表象されている。⑥の対称代名詞が「和グリヨ」であることも、「心易い間柄」ゆえである。

⑦^{シテ}ハテ扱ハハ氣之毒ナ事で△ル 私も最前から見ますに何とやらお色が悪ふ△ルヤウニ存ました 夫ならば爰に私の存た陰陽者が△ルか其様ナ支を請受て致されます 是ハ何と△ロウ(3オ)

⑦は、又アドの健康状態を知り、また、頼み事をされたシテの返答である。丁寧語「ござる」「ます(る)」の他に、「お色」という尊敬の接頭辞も使っている。おそらく、相談のつては、又アドから金銭のお礼をもらっているのである。相手を立てる敬語は欠かせられない。

⑧^又夫杜幸ひの事でおりやる どふぞ頼て呉さしませ

⑧は、自らを救う道が開けた又アドの喜びのことばである。感謝の心が、シテへの敬意表現となっている。「うでおりやる」という軽い丁寧表現、「さしませ」という軽い敬意を表わす命令形がそれである。

⑨^シ畏て△ル 併^{じかしながら} こなたの御身躰てハ余程お出しなされ

ずハ成り舛舞^マ 夫ハ何程^{耳之側面云} ナか様で△ル

⑩^マヲ、夫ハ余程で△ルか ⑪^シ左様で△レハ命にハ替られ舛舞程にお出し被成ませひ 祈祷さへなさるれハ其氣色ハ請受て能成ます

⑫^マ夫ならハ氣分にハ替られぬ程に兎も角も致うわこりよ太義なから頼て呉さしませ ⑬^シ心得ました 私の参て頼ミまして同道致て後程参りませふ ⑭^マさらハ斯参る

⑮^シ△リ舛るか ⑯^マ中へ ⑰^シさらハへ^{ト云字男ハ大臣程} (3ウ)

又アドに⑧と言われたシテの反応は、「畏て△ル」である。「心得た」でも「心得ました」でもなく、「畏て△ル」であるところ

に、シテが下位者であることが歴然である。しかし、現実には、このシテは、又アドを「喰い物」にするほどのやり手である。下手に出ながら、又アドをあやつれるのである。その本性が、傍線部に出ている。

又アドが「何程^{いかほど}」と聞くと、シテは金額を、ト書きの通り耳元でささやく。シテは少し間を置いて、「ナ。か様で△ル」と念を押す。すると、又アドは、「ヲ、夫ハ余程で△ルが」と、反応している。つまり、シテは、高額をふっかけたのである。シテはたたみかけるように、「命にハ替られ舛舞程にお出し被成ませひ」とすすめ、祈祷さえすれば全快すると保証する。

又アドは、シテの勧めに従うことにした。あらためて、「太義なから頼て呉さしませ」とシテに依頼する。この時のシテの返答は、「心得ました」のように格式ばらない言い方になっている。

その後、別れの挨拶があり、ト書きの通り、又アドは、大臣柱(ワキ柱)に坐す。現代の舞台だと、このような設定の場合は、

ワキ座ではなく、その奥、笛座前に坐して、『居ても居ない』演出となる。

⑩^シ是ハ如何な事 思ひもよらぬ事を申て参て△ル 亦爰に心易う咄す仁か△ル 先是へ参りて相談いたそふと存る 何斯参ても宿に居らりよふかいられ舞かしらぬ事しや めいよ爰かしこ走り廻る人しやに依て居らるれハ能 イヤ参る程に是しや(3ウ)

又アドの依頼を受けて、『陰陽者』(占い)の所へ行く際のシテの道行——一人言である。観客に向けての一人言であるので、『是ハ如何な事』という感動表現につづく二文は「△ル」を用いて、観客へのかしこまりを表わしている。

シテが「心易う咄す仁^(ひと)」というこの人は、傍線部のように「めいよ爰かしこ走り廻る人」であると言う。狂言において、市内(とりわけ、洛中)をここかしこ走り回る人に、スッパを代表にろくな人はいない。しかも、「めいよ」(名譽)という形容語さえ付いている。「名譽」は、もともとプラス評価の名詞であり形容動詞である。『太平記』などにも用例があるが、近世に入ると、へ1世にまれなこと。不思議なこと。また、そのさま。

へ2副詞。へ1から転じて、どういうわけか。不思議に。奇妙に。

の意味を生じ、「めいよう」と訛り、
⑪浮世草子・好色一代男(一六八二)六^(三)「座配にきやかに床しめやかに、名譽^(めいよ)、おもひを残させ」
の用法をもったり、さらに「めんよう」となって、

⑫滑稽本・浮世風呂(一八〇九—一三)前「ハテ、めんようなたった今^(いま)汲^(くみ)だがのう」

のような例も出てくる。⑩の「めいよ」は、機能の上から⑪に、ニュアンスの意味から⑫により近い。

⑬案内常之通^(テ) 今和こりよの方へ行うか杯と思ふ所へおりやつた 身共も此間さんぐ仕合が悪ふて渡世の送ふ様も無いに依て此事を相談致そふと存た処へわせた^(シ) 夫に付て仕合な変か有る 誰も無い^(カ)か 誰も無^(カ) 先斯通らしませ^(シ) 心得^(カ) 下ト云テ居テ(3ウ)

⑬の「案内常之通」は、アドの家を訪ねた際の挨拶に関するト書きである。アドは、シテを「わごりよ」「おりやつた」「わせた」で待遇しているので、きわめて軽い敬語ですむ親しい間柄であることが知られる。

アドは、傍線部のように言う。こつこつと働いた上での「仕合が悪い」(めぐりあわせが悪い)のではなく、賭け事などをして大負けしたであろうことが「さんざん」(散々)の語で推測される。

傍線部を聞いたシテは、「夫に付て仕合な変か有る」ともちかける。波線部が二人の間でかわされるのは、悪事の相談だからである。「つうかあ」でこういう流れになるというのは、二人がこのようなことを生業^(なりわい)の一つにしているからである。出来心^(できごころ)では、こうはいくまい。

⑭別の事でも無いか和こりよハアノ誰殿を知たか^(ア) アヲ、知た大分限者しや^(シ) 其分限なに付て今日身か所へわさせて此間ハ夢

見か悪ひ程に気分も悪ひと云てわせて祈禱ても棄ても能いのハあるまいかと云て談合にわせられたに依て身共の云う度^{ヒトモト}にハ爰に私の存た陰陽者か△ルか是か祈禱の上手で△ルと云たれハ夫を頼んで呉いといわる、に依て則礼物杯も定メタか何と⁽¹⁾是を取てそなたと身共と半分ツ、わけて⁽²⁾「一元手有程に亦商賣に取付ふと思ふか何と有るぞ（3ウ）4オ）」

⑭では、又アドが「アノ誰殿」と話題主となつて出てくる。現行の舞台だと、「誰」のところに当日の舞台で又アドをつとめる狂言役者の名前が入る。

アドは、又アドを「大分限者じや」と知つていた。「分限者^{おげんしや}」で「金持ち」をさすことは中世から行なわれていたが、近世でもそうであつたし、現在、宮崎県^(金10)をはじめ方言として日常生活で生きている地域もある。

シテの「其分限な付て」は、「普通の人は、そこまでしないが、その大金持だからこそ」以下のことを頼みに来たという前ぶりである。ここでシテは、又アドのことばを直接話法で伝えるが、その際、「祈禱ても棄ても能いハあるまいか」のように準体助詞「の」を使って、簡略にしている。準体助詞「の」は、近世ものちになるほど、一般的に使われてくるものである。

シテは、悪だくみの内容を、直接話法も含めて、「〜て『……』と云てゝに依て『……』と云たれバ『……』といわる、に依てゝが、〜てゝと思うが何と有るぞ」のように、長ゼリフで説明している。傍線「礼物杯も定メタ」というのは、⑨において、金額のとり定めをしたことをさす。波線(1)は、獲得金折半の条件を出

し、有無を言わさずアドを協力者に引き入れようとするものである。波線(2)は、人聞きよく表現されているが、「一元手^{ひともと}」で地道な仕事を始める以外に、賭け事をする意味合いも含まれている。

⑮「是ハ一段の事を云て来た^(シ) 夫に付和こりよ陰陽師と成て呉さしませ^(テ) 心得た^(シ) 亦少ハ其舞^(ヒト) なくハ成舞と思ふに依て身共其舞をする程にわこりよハ能様にいわしませ^(テ) 其段ハ氣遣さしますな⁽²⁾ 能ように云うが此舞でハ成る舞仕度をしやう^(シ) よかろう^(シ) 身共はあれへいて其通云う程にわこりよ仕度次第に暮合にあれへおりやれ^(テ) 心得た（4オ）」

又アドから大金をまきあげて山分けにしようともちかけられたアドは、「是ハ一段の事を云て来た」と喜ぶ。その返答をまつてましたとばかり、シテは段どりの打ち合わせに入る。それが傍線部である。ここでは「陰陽師（おんみようじ）」という、耳なれた語が出る。⑦⑭のシテのことばにあった「陰陽者」は、「おんみようじや」「おんみようーもの」と読んでも他に例のない語であつたからである。

シテとアドはきわめて親しい間柄であるので、「心得た」「仕度をしやう」（アド）、「よかろう」（シテ）など、丁寧語を用いない会話をかわしているが、物を頼む場合になると、「呉さしませ」「いわしませ」（シテ）、「氣遣さしますな」（アド）のように、「します」「さします」という軽い敬意を表わす語を使っている。しかし、室町時代語を反映する虎明本にあるような「さしめ」「しめ」ではないこと、幕末期の大蔵流台本である「成城本（ハ武悪）」でも「さします」は一例に抑え、「さしめ」八例、「しも」七例で

あることは、異なりを見せていることに注目しておきたい。

親しく、かつ、同等の間柄で、自称が「身共」(みども)、対称が「わごりよ」(和御料)であることが、⑬の場合同様、よくわかる会話群である。シテは、又アドに対する時は、⑦のように「私」という自称詞を用い、他称詞には「こなた」を用い、幾分かしこまりを見せていた。

⑮の波線(1)のセリフは、少々意味がとりにくい。「亦」(また)は、先の傍線部に添加して、つけ加える接続詞である。「陰陽師の祈りによって折伏されて怨霊が逃げ出す」ことを、「其軀」(そのてい)とさしている。「身共其軀をする」というのは、シテが怨霊を演ずるということ、「わごりよハ能様にいわしませ」とは、陰陽師役のアドが、その間適当にことばを合わせろということである。

波線(2)は、アドが、陰陽師の扮装をするということで、その装束付けについては、本曲末に、

⑯掛素袍 折烏帽子 ヘイカタゲ出ル
と、記されている。

打ち合わせの最後に、シテは、「暮合にあれへおりやれ」と言う。「暮合」は、夕暮れ時、夕方である。

⑰シのふく嬉しや まんまと仕済た 急て参り此由を申う
リ舁ルか 又誰しや イヤわこりよか シ中く私で△ル 御
祈禱をまんまとたのミまして△ル 後程御出被成うと被申ます
る 又夫ハ忝うこそ△レ シイヤあなたの御祈禱てはいかやう
の気色も其俣よふなります 又夫ハ嬉しう△ルト云テ
咄ノ内ニクル (4)

オ)

⑰の冒頭「のふく嬉しや まんまと仕済た 急て参り此由を申う」は、シテの又アド邸への道行である。傍線部の「まんまと」は現代感覚の「まんまと」のニュアンスではなく、冒頭の「まんまと仕済た」同様、善悪にかかわらず物事がうまくいったことを表わす副詞(オノマトペ)である。

シテは、陰陽師をあがめるべく、「御出被成う」「被申まする」のごとく敬語を使い、波線部のように他称詞として「あなた」を使って陰陽師を高めている。⑮における、シテとアドとの会話で、又アドが「あれへおりやれ」のごとく「あれ」と遇されていたのとは、大ちがいである。

⑱ア物申案内申 表に物申と有 案内とは誰ぞ ア物申 シ物申と
ハイヤ御出被成て△ルか ア中く私で△ル 其通を言ふて被
下い シ畏て△ル 最早御出被成て△ル 又斯御通り被成ませ
いと云て呉い シ心得て△ル 斯御通り被成ませい ア夫な
らハ通りましやうか 又中く(4オーウ)

⑰の末尾のト書き「ト云テ咄ノ内ニクル」は、直前の又アドの演技注ではなく、⑱の冒頭のアドの演技に関するものである。傍線部には発話者の表示がないが、又アドのセリフである。

⑱は、陰陽師に扮したアドが又アド邸を尋ねて来て、シテを仲介にして、又アドに顔を合わせる場面である。シテは、馴れ合いであることを隠すべく、アド(陰陽師)に対して、「畏て△ル」「御出被成て△ル」「斯御通り被成ませい」と敬語やかしこまりに余念がない。又アドよりも敬っているポーズは、陰陽師(アド)

に對して「畏て△ル」と遇したのに對し、この邸の主人である又アドに「心得て△ル」で済ませているところから知られる。

⑭ア不案内ニ△ル 又よふこそ御出被成て△ル 最そつとこうお通被成ませい アイヤ是テ能△ル 今朝アノ仁かわせましてお頼ミで△ルに依て参て△ル 又夫ハ遠路忝△ル 宜う御祈禱被成て被下ませい (4ウ)

⑮は、初対面の陰陽師(アド)と又アドとの挨拶である。二人の会話は、敬意を高め設定した上での「対等」がよそおわれている。かたや「頼られる人」、かたや「分限者」というバランスである。

傍線部の「よふこそ御出被成て△ル」は、さらにくざけると、「ようこそさせたれ」(虎明本「枕物狂」)となるが、現代語のように、「ようこそいらつしやいました」あるいは「ようこそ」一語になるのは、近代に入ってからである。

波線部「夫ハ遠路忝△ル」は、台本上にはそれと出ていなかったが、遠くに住んでいる陰陽師という情報が、⑨の謝礼を決める際、耳元でささやかれていたという設定である。遠路からなら、まさに「お足代」^{あしだい}が加算されてくる。

⑯今朝申上ました通りで△り舛ル 随分御祈願被成て御氣分の能成り舛るやうに頼ミ上舛る ア心得て△ル シ夫ならハ私ハ御暇申上舛る 亦後程参り舛る 又御太義に△ル 後程△レ^シ畏て△ル (4ウ)

⑰は、仲介役のシテが、陰陽師(アド)に向かつて、又アドへの祈禱を頼み、後ほど来ることを又アドへ告げて、この邸を去る

場面である。シテが「亦後程参り舛る」と言っているのは、又アドに謝金をもらうためである。⑨の耳元でささやいた時も、謝金は一括して自分がもらい後ほど陰陽師へ渡すと言っていた設定となっている。台本の文字を追っていると、セリフとして書きこまれていないので不備の感があるが、現実には舞台でセリフが流れゆく時は、観客は意外に理解できるものである。

⑱において、シテは、アドがにせの陰陽師であることを見透かされないために、アドに対して尊敬表現と丁寧表現をふんだんに用いている。それと同じ程度に、又アドにも、尊敬・謙讓・丁寧表現を用い、両者のプライドを満足させるような物言いをしている。丁寧「ます」に関して、一貫して、連体形・終止形ともに「まする」を使っているのは、終止形・連体形「ます」よりも古風な文体を意図しているというよりも、このシテの「かしこまり」^(注1)「あらたまり」を表現するものであろう。

傍線部の又アドのことは「御太義に△ル」は、現代語なら「お疲れさまです」にあたるニュアンスをもつ。この意の例として、『日国』は、大観本謡曲・葵上の「唯今の御出て御大儀にて候」の次に、虎寛本狂言・察化の「只今戻りまして御ざる やれやれ太儀や」を挙げているが、大観本よりも古い車屋本謡曲「葵上」では本文が微妙に相異し、確証としがたい。『時代別国語大辞典室町時代編』(三省堂)は、和泉流の狂言六義「金津地藏」の「大勢出て、御大儀じや、お下りめでたいと云て」を載せるが、この例の方が古いとみなせる。

⑲アこなたのお歳ハ幾つて△ル^{其時男} 又何十歳て△ル ア「何十

歳ハ何ノ年で△ルニ依て^{（改訂）}クルマネ／ラス 是ハ人ノ恨カ△ル 又ハ
ア夫ハいかやうの事て△ル ア是ハ女^{口傳}イヤ私ハ今迄終に
女と眼と目を見合いた事も△ラヌ（4ウ）

②①からは、陰陽師（アド）と男（又アド）との会話となる。最初のト書き「其時男ノ年ヲ云」は、舞台上ではその時の演者の実年齢を言うことをさす。おそらく、シテやアドに比して、若い役者を又アドには使うから、二十歳あるいは三十歳と答えることになるであろう。二番目のト書き「ユビタクルマネヲスル」は、陰陽師が年齢によって占いをする様子を表現したものである。そして、出した結論が、「人ノ恨カ△ル」である。その恨みの最初として、「女の恨み」をもってきた。本文「是ハ女」がそれであるが、「口傳アリ」とト書きしたのみで詳細は文字に表わしていない。これが、大蔵流番外曲「呪ひ男」になると、中心的プロットとして展開すべく、

②②法へそれならば。先づ手占を置いて見よう。たんちやうけんく。ふう。先づ手占を見るに。そなたはいかう女の恨みがあるとする。男へはあそれは氣の毒ぢや。私はさやうの覚えも御座りませぬが。法へイヤさうおしやつても、慥にさう見ゆる。イヤそれに就いて思ひ出した。そなたはそれ。幼な馴染のお内義が。それはおくれたではないか。男へさればその女共は。こなたにも色々御祈禱など頼みましたれども。叶ひませいで。終に相果てました。法へふう。その後。後づれでも迎へさしました。男へさればその後。まだ獨り住居もなりませぬところで。もう各様へも沙汰も致しませずして。女共がかはりを置きまし

て御座りまする。法へそれく。そのやうな事で。先のお内義の恨みが深いとある。これはいかうむつかしい。一算見ずばなるまい。男へ御ろんじやれて下されませ。法へ心得た。（下652頁）

などとなつてゐる。②①の口伝の実演も、②②ほど長いセリフではなかつたと推測される。先妻が亡くなり後妻をもらつたという設定でもない（それは、②①の傍線部で判明する）ので、二十歳代、三十歳代の若い役者が又アドの場合、女につれなくなしたとか、女との約束を破つたとか、その程度のことであらう。

口伝として秘されていることが、舞台で発されると、又アドは、傍線部のように答える。これは、まだ女性に縁のない生^{うぶ}な独身者であることを表現している。

②③アイヤく女なれハ能△ルか是ハ男の恨ミと見へて△ル 又ハア^アこなたのお生れハ御富貴て何事も御不自由にハ無お生れ付て△ル ②④其御富貴に付てハまつしき者が今恨やうな事に付て御無心杯を申を其儘に被成て置せられる、報いか少ツ、積りく致いたと見へまして△ル 又イヤ私は随分慈悲善根も致て△ル（4ウ5オ）

②①の傍線部を聞いた陰陽師は、軌道修正を計る。

それが、②③の冒頭のセリフである。女でなければ男、それも不特定多数の男を想定したセリフを陰陽師は吐く。傍線(1)(2)がそれぞれであるが、(1)は、シテから得た情報であり、アド自身世間の噂から得ていた情報である。(2)の「其御富貴に付てハ」は、「そのお金持であるということに關しまして」の意であるが、むしろ、

「あなたがお金持ちであるからこそ」（お金持ちがわざわざいして）のニュアンスも持つ。同じセリフ内の「恨やうな事に付て」は、「恨むような事があつたとしたら、たとえば」の意でつづく。「御無心杯を申を其儘に被成て置せらるゝ」という表現に、観客の中にははっとさせられる人もあろう。まさに、シテやこのアドが「無心を言う」やからであるからである。にせ陰陽師のうまいところは、「報いか少ツ、積りく致いた」のごとく、相手が否定しても、次の話がつづくような表現をとっていることである。

又アドは、波線部「イヤ私は随分慈悲善根も致て△ル」と、陰陽師の推測（占）を否定する。

②^ア尤夫ハさふて△ろうか夫共に何そに付て少々ツ、の恨か積りくたもので△ろう 打捨参せらるれハ大変て△ル 又「随分御祈禱被成て被下い ^ア夫ハ祈禱して遣せ舛るか乍去祈禱の内自然と驗シ杯か△ルか或ハ目にさまくのものか見ゆる事も△ろうか必おじさつしやるな ^又心得ました（5オ）

陰陽師も、このあたりで奥の手を出す必要がある。そこで、「尤夫はさふて△ろうか」と、又アドの言い分を認めつつ、「夫共に何そに付て少々ツ、の恨か積りくたもので△ろう」と、「恨」一般に結着させる。そして、祈禱となる。

その後、傍線部のセリフが肝要となる。又アドに恨みをもつ怨霊が登場する場面をつくるためである。「自然と」は、副詞「もし」の意。「験シ」とは、怨霊の姿であり、「或ハ」以下の「目にさまくのものか見ゆる」というのも、結局は、怨霊のふるまいをさす。「おじさつしやるな」は、完全に目をふさいでいると怨

霊登場の効果がないので言っているだけで、実は、又アドに凝視されると困るわけである。

②^アまつ是をこふきさせられい ^{ト云テ輪座ニ有} ^{カケル}さらハ祈禱を

始めましやふ 夫天地開ケ地堅マリシヨリ此方伊弉諾伊弉册尊天之岩倉之苔筵之上ニシテ男女夫婦之カタラヒナシ日月神蛭子素戔嗚烏ヲモウケタマヒ今人跡ニ傳ル 是人者天地之霊也夫何ソ亡霊鬼神妨ヲナシ非業命ヒヲ取ラントヤ 大小之神祇諸佛菩薩明王部天童部九曜七曜二十八宿ヲ驚奉肝膽ヲ碎禱リケリ謹上サンゴ 再拜くく ^{シテ素戔嗚烏ヲモウケタマヒ今人跡ニ傳ル} ^{シテ}イデ喰ホウく

^ア何ころふじられて△ルか ^{ス男小袖ノ内ヨリ} 是ハヲソロシヒ事で△ル ^アサイハイく ^{シテ}イデ喰ホウく ^②是ヨリ鉄輪ノ謠ノキ

リヲウタウ 口傳アリ ^{イデ}く ^{命ヲ命ヲトラン} 姿ハ目に見へぬ鬼とぞなりにけり

^アサヒハイくく ^{最早能△ルト云テアトハ小袖ヲトリテヤリ} （5オ）

②^⑤は、いよいよ陰陽師の祈禱場面であり、シテの化けた怨霊が出てくる場面でもある。この狂言の序・破・急の、破の破^⑤である。

傍線(1)、アドが「まつ是をこふきさせられい」と言つて、熨斗目(男物の小袖)を被せるのは、又アドに多少の目隠しを用意し、しつかり状況を見させない工夫でもあり、一方、陰陽師が霊と人間をへだてる結果として用意するものである。霊がとりついても、衣だけを霊に取らせ、中味の人間は陰陽師が助けることも出来る。

アド扮する陰陽師の呪文として、まず、。点部が出る。これ

は、能「鉄輪」に出る、

②⑥ 夫れ天開け地固つしよりこのかた。伊弉諾伊弉冊尊。天の磐座にして。みとのまくばひありしより。男女夫婦のかたらひをなし。陰陽の道。永く傳はる。それになんぞ魍魎鬼神（注12）妨をなし。非業の命を取らんとや。地。一大小の神祇。諸佛菩薩。明王部天童部。九曜七星二十八宿を驚かし奉り祈れば（謡曲二百五十番集）359頁、「鉄輪」

を、ほとんど下敷きにしたものとなっている。つまり、②⑤の。点部では、②⑥の*部分に「之菩提之上」を入れ、「みとのまくばひありし」（△印）を抜き、**に「日神月神蛭子素盞烏ヲモウケタマヒ今人跡ニ傳ル 是人者天地之靈也」を入れている。この補入のため、謡にあつた「陰陽の道。永く」（△部）が抜けた。元の謡に「魍魎鬼神」とあるところを、。点部では「亡霊鬼神」としている。「亡霊」は「ボウレイ」だが、「ボウリヨウ」と発音させたか、あるいは、「亡」には「モウ」の音もあるので、「モウリヨウ」と発音して、「鉄輪」の「マウリヤウ」と重ねあわせたものであろうか。***に「肝膽ヲ碎」を入れこみ、そのあと「痔リケリ」と謡風にまとめあげているが、能「鉄輪」では、②⑥の前に来るワキ（阿部晴明）の詞章「……おのく、供物を調べて。肝膽を碎き、祈りけり。謹上再拝」であるものを、順不同にして生かしてきたものと見られる。

なお、②⑤の。点部の呪文のうち、「伊弉諾」から「モウケタマヒ」までは、保教本「夷毘沙門」（二257頁）、宝暦名女川本「恵比須大黒」（六254頁）、安政賢通本「恵比須毘沙門」（上75

頁）における西宮多比す三郎の口上に見えるものと同一であり、かつ、異流の大蔵流虎明本狂言「多比す大黒」（二9頁10頁）「多比す毘沙門」（二14頁）とも同一であるので、狂言方の詞章として広く流布したものになっている。したがって、『山口鷺流』所収の「恵比須毘沙門」（二333頁）、『佐渡鷺流』所収の「恵比須毘沙門」（4頁）「恵比須大黒」（209頁）も同じ詞章を伝える。

②⑤の。点部「是人者天地之靈也」は、これら伝承の台本にはなく、成城本の独自性が見られる。この文言として、吉田兼好「徒然草」第二百一十一段の「人は天地の靈なり」（岩波日本古典文学大系 260頁）が、まず、思い浮かぶが、吉田兼俱や清原宣賢、吉田兼石などの吉田神道、あるいは、その系統を受けた近世の神道論には、出る文言である。近世の陰陽師や占い師が呪文の一部にとり入れていた可能性は高い。成城本はそれらの反映であろうか。

②⑤の波線部「イデ喰ホウ」は、シテの扮する怨霊のおどし文句であるが、鬼が登場する際の決まり文句を口にするところが、まさに「狂言」である。

途中で、陰陽師（アド）は、「何ごろふじられて△ルか」と、又アドに確認し、「是ハヲソシヒ事で△ル」という返答を受けた後、再び祈祷をする。その際は、傍線部②のごとく、能「鉄輪」のキリを謡うことになる。「口傳アリ」と記すので、この台本から詳細はわからない。

●点部は、その「鉄輪ノ謡ノキリ」であるが、実際の、キリは、

②⑦^{シテ}「いで／＼命を取らん。地「いで／＼命を取らんと。しもとを振り上げうはなりの。髪を手にかまいて。打つやうつの山の。夢現^{ゆめうつ}とも。分からざるうき世に。因果はめぐりあひたり。今さらさこそくやしかるらめ。さて懲りや思ひ知れ。シテ「こ

とさら恨めしき。地「ことさら恨めしき。あだし男を取つて行かん。臥したる枕に立ち寄り見れば。恐ろしや御幣^{みでこ}に。三十番神^{さんじふばんじん}まし／＼て。魍魎^{まうりやうきん}鬼神^{きん}は穢^{けが}らはしや。出でよ／＼と責め給ふぞや。腹立^{はらだち}や思ふ夫^おをば。取らであまさへ神々の。責を蒙^{おほ}る悪鬼^{あくおに}の神通力^{しんつうりき}自在^{じざい}の勢^{いき}絶えて。力もたよ／＼と。足弱^{あそく}車の廻^{まわ}り逢うふべき時節^{ときせふ}を待つべしや。まづこの度は帰るべしと。いふ聲ばかりはさだかに聞えていふ聲ばかり聞えて姿は目に見えぬ鬼とぞなりにける目に見えぬ鬼となりにけり〔謡曲

二百五十番腹』360頁「鉄輪」

である。成城本は途中を略しているので、②⑦との詳細な対校はできないが、その日与えられた狂言時間内に、多少の省略を臨機応変にまじえつつ、ほぼこの通りを謡うのであろう。

②⑤末尾において、陰陽師（アド）は、「再拜」を三回くりかえして祈りをしめくり、「最早^{もはや}能^よ△ル」と、怨霊退散を告げる。そして、ト書きのように、又アドがかぶっていた小袖をとつてやるのである。

②⑧何トゴロウジラレテ△ルカ 又サテ／＼すさまじひ事て△つた ア何と御氣分ハ能△ろうカ 又思ひなしか能ウ△ル 扱／＼御影で忝ウ△リマする アサラハ御暇申まする 又御帰なされまするか 中／＼ 又能△りました 口傳（５オーウ）

②⑧は、怨霊退散後の陰陽師（アド）と男（又アド）との会話である。気分が良くなったかと聞いた陰陽師に対して、又アドは、「思ひなしか能ウ△ル」と答えている。このセリフ中の「思ひなしか」（傍線部）について、『日国』は、

②⑨談義本・錢湯新話（一七五四年）三・麻疹軒人相を見違たる談「思ひなしか調子も乙に成まして、日比の高咄もなりませぬが」を初出とする。②⑨は一七〇〇年代後半の事例であるが、のち、『浮雲』（二葉亭四迷、一八八七年～八九九年）・『たけくらべ』（樋口一葉、一八九五～九六年）・『星座』（有島武郎・一九二二年）と、用例はつづく。

成城本は幕末期の写本と推定されるから、語彙の上に当代性がぼろりと現われた部分である。

又アドがあらためて陰陽師に礼を言う、アド扮する陰陽師は、「サラハ御暇申まする」と、この屋敷を去る。又アドが「能△りました」（よくいらつしやいました）と送り出すことばの下に「口傳」とあるのは、又アドに関するものではなく、③⑩に再び登場するシテと、アドが舞台上ですれちがう際の、演出上の口伝である。「うまくやったか」「うん、うまくやった」「あとで礼金を」「わかった」という、ことばを伴わない目くばせなどのしぐさを観客の目に届けなければならない。演者の技量が問われるところでもある。

③⑩御見舞申まする 何と御祈禱のお影ですきと能△りました 又御影でズント能おりやる シ夫ハ一段の事て△りまする 今朝申ました礼金を遣ハされませい 又心得た 能様に云て呉

さしませ シ畏て△ル サラハ御暇申まする 又おりやるか
中シく 又サラハく (5ウ)

③⑩は、陰陽師の加持祈祷で快方に向かったにちがいないと確信するシテが、再び訪ねて来て、又アドと会話をする場面である。

。点をつけた「すき」と「ズント」というオノマトペの対照が効果的である。シテは、「今朝申ました礼金を遣ハされませい」と言つて、礼金を受けとつて去つて行く。又アドが「能様に云て呉さしませ」と言っているのは、陰陽師への謝礼がシテを通して渡されることを考えているからである。

③⑪ 此内アトハ太鼓座ニ待テ居テシテヲ見付テ

アノウく今のを半分おこさしま

セ シ宿ゑ歸りてやろう ア宿へと云うか有物か 直ニ爰テ配

分シテおこさしませ シ何と此途中で成る物か ア是悲氏トラ

ネハ置ヌ (5ウ)

これは、この狂言「呪咀男」の「急の急」であり、この狂言の「落ち」である。⑭において、せしめた礼金は、「半分ツ、わけて」(⑭の波線(1)参照)ということになっていたのでアドは待つていたのであるが、とにかくこういう連中は仲間同士信じがたいところがあるので、もらつて来た直後に折半した方が、「ネコババ」「ピンハネ」等の危険性がない。「宿ゑ歸りてやろう」というシテと、「直ニ爰テ配分シテおこさしませ」というアドとの取り合いが始まった。

③⑫ 又是ハ殊の外表かサワカシイと云テ

扨ハ最前鬼に成たハそちか

まいすめ 憎い奴の ヤルマヒソく (5ウ)

家の外での喧嘩さわぎに、「表かサワカシイ」とでてきた又ア

ドに、この現場を目撃されて、「扨ハ最前鬼に成たハそちか」と見破られ、「まいすめ 憎い奴の ヤルマヒソく」と追ひ込みされる場面である。

③⑬ 替謡

イデく命ヲトラントくシモトフリ揚病者ノ脇ニハシリ行ケハ、ソロシヤ三十番神マシく亡霊鬼神ハ—— 腹立や思フ人をハとらてあまさへ (5ウ)

又云

イデく命—— シモト振上ケ立寄ミレハ不動明王利劔ヲ引投

出ヨくト責玉フゾヤく

○先此度ハ歸るへしくト虎空ニ上りて失にけり (6オ)

③⑭は、シテ扮する怨霊の出る時の、謡の別バージョン(替謡)を示したものである。

(イ)の「イデく……あまさへ」における、点部は、「鉄輪ノ謡ノキリ」(用例②⑦参照)が、「うはなりの。髪を手にかまいて。……あだし男を取つて行かんと。臥したる枕に立ち寄り見れば」のように、うわなり打ち(前妻が後妻に鬱憤をはらす行為)に限定されるのをきらい、狂言「呪咀男」の設定に添って「病者ノ脇ニハシリ行ケハ」と変えたものである。「とらてあまさへ」で切れ、以下が記されていないのは、これ以降は、②⑦と同じだからである。

③⑮「又云」以後の(ロ)は、物語の設定をそれと言い立てず、より広く通用する謡になっている。つまり、

③4 イテく命を取らん。いでく命を取らんと。シモト振上ケ▲
立寄ミレハ不動明王利劔ヲ引投出ヨくト責玉フゾヤく▲先
此度ハ帰るへしくト虎空ニ上りて失にけり
となつており、▲印の所で、②7を大幅にカットしており、それだ
け上演時間も短縮されている。

③4だと、「鉄輪ノ謡ノキリ」より遠いだけに、逆に、狂言「呪
咀男」の独自性がきわだつ演出となる。

『狂言二百番集』所収の大蔵流八右衛門派番外「呪ひ男」の場
合、②2に引用したように、能「鉄輪」と同じく、うわなううちの
要素があるので、謡は、

③5 シテニ雪へ浮雲の。深き恨みの闇路経て。今宵限りの。月や見
ん。カケリ。いでく命を取らん。地へいでく命を取らんと。あ
たら男を取つて引き立て。苔を振上げ打たんとすれば。恐ろし
や壇上に。矜羯羅制叱迦ましくで。出でよくと責め給ふぞ
や。腹立ちや。思ふ夫をば取らであまきへ矜羯羅の。責めを蒙
る悪鬼の神通。通力自在の勢たえて。力もよわくと。足弱車
の廻り逢ふべき。時節を待つべしや。先づ此度は戻るべしと。
いふ聲ばかりかすかに残り。いふ聲ばかりかすかに残れて鬼女
の姿は失せにけり。(下64頁)

となつており、「鉄輪」のキリに多くを依っている。^(注15)また、成城
本「呪咀男」の場合、この謡で狂言が終了するのではなく、「急
の急」として、③1③2があるわけなので、謡そのものの緩急のリズ
ムなどを含む謡い方も、異なっていたはずである。

③6 シテ
アト見せ消シ
兩人氏始縞ノ物狂言上下

後シテ 段熨斗目 厚板壺折 鬼頭巾 面武悪
同アト 掛素袍 折烏帽子 ヘイカケ出ル
又アト 熨斗目 長上下 少サ刀 扇
外ニ 熨斗目カ伯ノモノ 札金紙也 水引懸ル

③6は、装束付けおよび作物注記である。③6の冒頭は、「シテ」
「アド」並び書かれていたものを、後、「アド」を見せ消ちされた
姿を呈する。しかし、「兩人氏」とある、つづく文を見るかぎり、
「シテ」「アド」のままで良かったはずである。つまり、シテも
アドも初登場の際は、「縞ノ物・狂言上下」の太郎冠者仕立てで
あることが知られる。又アドの「熨斗目・長上下」が、大名類や
小名類の主仕立てであるのに対し、シテやアドはそれより身分、
地位の低い者という設定を反映している。「後シテ」は、能に準
じた呼称をとつたもので、②5で、シテが怨霊に扮して「イデ喰ホ
ウ」と出てくる時の装束である。「武悪」^(注16)面は、狂言「清水」や
「伯母ケ酒」で、鬼を表現する際に付ける狂言面である。

「同アド」の「同」は前行の「後」をさし、「後アド」を示して
いる。陰陽師に扮したアドが、①8において又アドの家を訪問する
際には、この装束に替えて出てくるのである。

「外ニ」とあるのは、用意する「作物」の件であり、「熨斗目カ
伯ノモノ」は、②5においてアド扮する陰陽師が「まつ是をこふ
きさせられい」と又アドにかぶせた小袖のことである。「札金紙
也 水引懸ル」というのは、③0において、又アドよりシテに渡さ
れる「札金」であり、③1においてシテとアドが取り合うものであ
る。金を紙で包み、水引をかける礼法は、現代と同じである。

四 おわりに

以上、前節を通して、へ曲章四番〈本「呪咀男」のセリフ分析を行なってきたが、『狂言三百番集』所収大藏流八右衛門派番外「呪ひ男」が、パロディーにしろ、能へ鉄輪につきすぎているのに対し、スツパ仲間のたくらみと仲間割れを劇の中間とオチに配して、立体観のあるドラマに仕上げることがわかった。ことばづかひも、場面場面に応じて、入念な設定や配慮がなされており、台本として練られたものであることが知られた。

怨霊を加持祈祷する謡も、「替謡」まで用意され、この曲が、一時期、かなりの頻度で上演されていることもしのばれた。また、②①の「口傳アリ」、②⑤の「口傳アリ」、②⑧の「口傳」という注記のあり方も、数十年以上の上演伝承を知らしめるものである。そのような伝承をうけたものが、成城へ曲章四番〈本「呪咀男」である」と見なせるのである。

大藏流八右衛門派番外曲「呪ひ男」につき、橋本朝生二〇一二・九『続 狂言の形成と展開』所収「付録 狂言台本・曲目所在一覧 補遺」の「のろひ男」項を見ると、「他」19」と記されている。《他》とは、三流以外の《その他》の意である。「19」とは、

③19 狂言大外・新 ①天理 ②狂言大外・新 ③一一 ⑤石田元季 ⑥一二五 ⑦堀村平太郎蔵本の写 ⑧橋本朝生「中世史劇としての狂言」146ページをさす。

橋本氏が大藏・和泉・鷺三流以外の《その他》に分類された天理図書館蔵「狂言大外・新」所収「のろひ男」について、小林賢次所持の写真版によって検討を試みたところ、『狂言三百番集』所収の「呪ひ男」と同一であった。日本語史研究という面から、『狂言大外・新』に注目したのも小林賢次であり、その著「狂言台本とその言語事象の研究」第八章「言語資料としての天理図書館蔵「狂言大外」「狂言新」」には、

③⑧「狂言大外・新」の書誌的または狂言史的事項については、稲田（一九九八）に詳しく、ここでは、それを参照しながら、問題点について簡単に述べておく。「大外」（読み方は不明）とは番外曲をさすらしく、大藏流における番外曲の類を集成したものとみられる『狂言大外』一〇冊には各冊一〇曲計一〇〇曲（重出を除くと九七曲）が載せられている。また、『狂言新』には新作狂言六曲が載せられている。（182頁）

とまとめられているから、天理図書館蔵「狂言大外」第六の26オ〜29ウに書写されている「のろひ男」は、大藏流番外曲であることはまちがいない。

また、つづいて、

③⑨稲田（一九九八）においては、「狂言大外」（堀村本）の各曲について他の台本との関わりを精査した上で、「大藏流関係の台本に見える曲」と「元来大藏流の非所演曲」に分けてさらに細分し、鳥取藩において宝永〜正徳年間に演じられた稀曲の多くが収められていることなどから、鳥取藩の役者原勘五郎、大津の川嶋家を介して、大津の堀村八二郎に伝承された経路を示し

ている。一方また、橋本（一九九七）においては、紀州の松井家からの経路も推測されている。他の台本に見られない独自の曲が存在するなど、異色の台本として興味深いものがある。

（182頁）

ともまとめ、台本の成立過程で鳥取藩原勘五郎、大津の川嶋家、大津の堀村八二郎、紀州の松井家の関与があったことが知られる。成城本「呪咀男」を所収する成城〈曲章四番〉本には、伝右衛門派の「驚十代目拱辰先生」（驚伝右衛門寛太郎）、「御本丸小十人衆 吉見儀介」（江戸城御本丸小十人衆は、旗本待遇の武士である）、岡山義憲、西口克太郎吉迪（文左衛門）の名前が見られ、^{（注19）}驚流ではあるが武士で狂言を演じ、かつ若い宗家——供辰先生に一目置かれた人々の姿がしのばれる。『狂言^{大外}』の成立にも、相似た人間構図を見るのである。

小林賢次は、さらに稲田説を引いて、
④これらの曲の中で、稲田氏が、「狂言記系諸本に近い曲」として示しているのが、次のものである。

早漆 張蛸 樽髻 連雀 箕被 とちはくれ 苞山伏 佐渡
狐 手負山賊

これらのうち、「苞山伏」（大外七）は『狂言記^{正徳}』と、どちはぐれ（十）は『続狂言記』と、「佐渡狐」（七）、「手負山賊」（七）は『狂言記拾遺』の本文と、それぞれほとんど一致している。また、「箕被」（十）は、冒頭は本文が異なるが、途中からほぼ『続狂言記』と一致している。これらは、いずれも小異はあるものの、版本を書写したものとみて誤りないであろう。

う。流儀における通常の伝承とは明らかに異なるものである。

残りの「早漆」（四）、「樽髻」（七）、「張蛸」（八）、「連雀」（九）は、『狂言記^{外五十番}』に所収されているが、詞章は大きく相違しており、「狂言記系諸本に近い」というのは、筋立て等に関してのことである。（182～183頁）

④「苞山伏」「どちはぐれ」などの五曲は、『狂言^{大外}』の親本（堀村本）の筆録時に、書写すべき適当な台本が得られず（他の曲と同様であるが、近世末期頃の大蔵流上演曲には当然含まれていない）、やむをえず版本を利用したものかと思われる。

（183頁）

のごとく、自らの調査を踏まえた上で、日本語学者としての見解を提示している。

今、小林賢次二〇〇八・二より丁寧に引用を重ねたのは、同書を若い研究者の全てがひもといてくださるとは限らないこと、今後、『狂言大外』の資料利用に関して、③⑧～④のまとめがきわめて有益であることを考慮したからである。

『狂言大外』の親本（堀村本）の筆録時に、成城〈曲章四番〉本所収の「呪咀男」は、台本として利用されていない。おそらく、現行曲として舞台にかけていた驚流側から、台本として流れ出なかったであろう。それはまた、別趣向の「のろひ男」が大蔵流番外曲として存在していたからでもある。

大蔵流八右衛門派番外曲「呪ひ男」ほどではなくとも、驚流の「呪咀男」は、能「鉄輪」のパロディーであり、能と能の間に演じられる狂言としては不向きである。成城〈曲章四番〉本「呪咀

男」は、曲の構成や展開は面白いのであるが、曲目に「のろい」が入り縁起が悪いため、祝言としての能会には不向きであり、座敷狂言としても、余興としてこの曲が演じられる場は限られていたであろう。そこに、幕末期の混乱や鷺流の衰退がからみ、台本そのものもほとんど残っていない状況に至ったものと考えられる。

しかしながら、今回、考察を加えたように、〈曲章四番〉本所収「呪咀男」は、演目としては伝承のあるよく練られた面白いものである。山口鷺流狂言保存会、あるいは、佐渡鷺流狂言保存会の演者の方々が、復曲して下さる機会があれば、研究者としても観客の一人としても、こんな嬉しいことはない。

注

(1) 請求記号…912・3/KY3/3 (W) 登録番号…Y093280

(2) 本稿に引用のない台本もあるが、三流の台本現存状況が一目でわかるので、各流主要台本について、以下、簡単に記す。

なお、各台本の詳細については、小林賢次二〇〇八・二「狂言台本とその言語事象の研究」(ひつじ書房)の4～9頁が明解で大いに参考となる。

〈大蔵流〉

[1]大蔵虎明本…『大蔵家傳之書 古本能狂言』(臨川書店)の影印に拠る。

[2]大蔵虎清本…古川久編『狂言古本二種』(わんや書店)の

翻刻に拠り、『近代語研究』第三集所収の林田明編「影印」を参照。

[3]大蔵虎寛本…笹野堅校訂『能狂言』(上・中・下)『(岩波文庫)の翻刻に拠る。

[4]大蔵虎光本…橋本朝生編『大蔵虎光本狂言集』(一～四)『(古典文庫)の翻刻に拠る。

[5]山本東本…小山弘志校注『狂言集』(上・下)『(岩波日本古典文学大系)の翻刻に拠る。

[6]茂山家本…北川忠彦 安田章校注『狂言集』(小学館日本古典文学全集)の翻刻に拠る。

〈和泉流〉

[7]天理本『狂言六義』…天理図書館善本叢書『狂言六義』(八木書店)の影印に拠る。

[8]和泉家古本『六議』…池田廣司解題・校注『和泉家古本『六議』』(『日本庶民文化史料集成 第四卷狂言』所収)の翻刻に拠る。

[9]波形本…原本の写真(小林賢次所持)に拠る。

[10]雲形本…原本の写真(小林賢次所持)に拠る。

[11]三百番集本…野々村戒三・安藤常次郎校注『狂言三百番集』(上・下)『(富山房百科文庫)の翻刻に拠る。

〈鷺流〉

[12]延宝忠政本…田口和夫『鷺流狂言』延宝・忠政本『翻刻・解説』(『静岡英和女学院短期大学紀要』第一一号)に拠る。

〔13〕享保教本…天理図書館善本叢書『驚流狂言伝書保教本（一）

（四）』（八木書店）の影印に拠る。

〔14〕宝暦名女川本…北川忠彦・関谷俊彦「翻刻 驚流狂言『宝暦名女川本』（一～六）」「女子大國文」第一〇五～一一号）に拠る。

〔15〕安政賢通本…野々村戒三解説・古川久校註『狂言集（上・中・下）』（朝日日本古典全書）の翻刻に拠る。

〔16〕山口驚流狂言資料集成…驚流狂言記録作成委員会編同名の本（全三冊。山口市教育委員会）に拠る。

〈流派固定以前のもの〉

〔17〕天正狂言本…古川久編『狂言古本二種』（わんや書店）に拠る。

〈版本狂言記〉

〔18〕『狂言記 正篇』…北原保雄・大倉浩『狂言記の研究』（勉誠社）の影印に拠る。

〔19〕『狂言記 外五十番』…北原保雄・大倉浩『狂言記外五十番の研究』（勉誠社）の影印に拠る。

〔20〕『続狂言記』…北原保雄・小林賢次『続狂言記の研究』（勉誠社）の影印に拠る。

〔21〕『狂言記拾遺』…北原保雄・吉見孝夫『狂言記拾遺の研究』（勉誠社）の影印に拠る。

〔3〕池田廣司一九六七・三『古狂言台本の発達に關しての書誌的研究』（風間書房刊）付録三。

〔4〕『番外曲』につき、『日本国語大辞典』（小学館。第二版）。

点略称）は、「狂言で、江戸時代および明治時代に作られた新作曲、また、他流派から取り入れた曲をいう」と、説明する。

〔5〕『佐渡驚流狂言』（真野町教育委員会一九九九年二月刊）にも所収されていない。

〔6〕「又」「シ」などは、それぞれ、「又アド」「シテ」の略であり、本稿では、発話者につき、例文によつては、（一）に入れて明示している。

〔7〕『日国』の「しんだい」項語誌には、「進退」から生じ、中世に「シンダイ」と連濁して財産の意を表わすようになった語が、近世、「身袋」「身体」（身軀）などの表記を生じ、そのうち「身代」と当てるが多くなったことを概説する。

〔8〕原本における「記号は、この曲において珍しい。

〔9〕①の引用を含めて、『日国』参照。

〔10〕筆者は、昭和三三年頃、宮崎市内の女子中学生との日常会話に、この語を確認している。当時、住んでいた京都でも母の故郷・鹿児島でも耳にしたことがなかったので、とても耳に立ったことを記憶している。

〔11〕『元和卯月本謡曲百番』に、「葵上」は収録されておらず、当たれない。

〔12〕古い観世流本文を伝える『元和卯月本謡曲百番』に「鉄輪」は欠けている。古い金春系能本である『車屋本謡曲集』では、同文となっている。

〔13〕吉田神道説を伝える『日本書紀抄』に關して、小林千草一九

九二・五『日本書紀抄の国語学的研究』（清文堂出版刊）、一九九四・一一『中世のことばと資料』（武蔵野書院刊）、二〇〇三・三『清原宣賢講「日本書紀抄」本文と研究』（勉誠出版刊）などがある。

(14) 『車屋本謡曲集』との相異は、最後の「目に見えぬ鬼となりにけり」のくり返しが車屋本にはないことである。

(15) 「鈴羯羅制叱迦」は、能「善界」や「壇風」などで、祈りのことばにこめられている。ここもその応用か。

(16) 大蔵流山本東次郎家蔵「肉色武悪」面を、小林千草・千草子二〇〇九年一月『ことばから迫る狂言編——理論と鑑賞の新視点——』（武蔵野書院刊）のカバーに掲載させていただけだ。

(17) 瑞木書房刊。

(18) 「狂言番外曲の伝承経路（上）（下）——天理堀村本所収曲をめぐって——」（『芸能史研究』第一四〇号、一四二号）

(19) 小林千草二〇一六・三(3) など参照。

（こばやし・ちぐさ）東海大学元教授